



ワンコイン・ スクール通信

ワンコイン・スクールプロジェクト、始動！ 仙台市立広瀬小から、全国に向けて発信！



左より）ラオスの布をはおる菊地校長、
児童代表早坂さん、石川PTA会長、
AEFA理事長 谷川、伊藤PTA役員

2月26日。仙台市立広瀬小学校から、『子どもたちの行動と力で』ラオスに学校を創ろう！プロジェクトが全国に向けて発信されました。

同校は仙台一のマンモス校で、平



テレビ集会で、AEFA理事長
谷川から、ラオスのお話

成21年4月に愛子小学校を新設、分離独立することからお別れ行事としてまつりを開催。子どもたちの思い出に残すと共に、同校の教育目標の一つが「地球人の育成」であることから、親子で世界に目

向け教育支援を行うべく、まつりの売り上げがこのプロジェクトに贈呈されました。分離後も、広瀬小・愛子小・そしてラオスの子どもたちとの交流を続けます。

テレビ集会で行われた寄付金と感謝状の贈呈式にAEFA理事長 谷川が出演。ラオス山岳少数民族の手織り布や、お祝いのお祈りのときに腰に巻く布を、「ラオスの友だちからの友情の印です」と紹介、贈呈しました。

集会の後は、5年生を対象に“ラオスってどんなところ？子どもたちはどんな生活をしているの？ラオスの学校って？”スライドで紹介。ポンタン小をどんな学校にしたいか、みんなでアイデアも出し合いました。「毎日の水汲みは大変だから、学校に水道を作ったらいいと思う」との意見に、谷川が「水道を作るのはとても大変なことだけど、これから一緒に考えていきましょう！」と力強く答えました。授業が終わった後に書いた感想には、「ラオスの学校をこんな学校にしたい！」という思いがあふれていました。

6年生になると、ラオスとの交流がいよいよ始まりま



ポンタンへは川を渡ってゆく

「ワンコイン・スクールプロジェクト」とは・・・

子どもたちが創る夢の学校

世界に目をむけ、同じ地球に生きる他の国の子どもたちを意識し、1人500円を1万人が出し合って、学ぶことが困難な状況の子どもたちに学校を建設して「学ぶ場」をプレゼント、交流、夢を共有するプロジェクトです。

日本の子どもの資金と企画により、アジアの離村に学校建設を実現。建設地は、ラオス南部サラワン県サラワン地区ポンタン村。現在、同村では50年前に村人が作った板葺きの小屋に、181人の子どもがひしめきあって学んでいます。

学校建設費は、日本の子どもたちの資金によります。単なる募金活動ではなく、子どもたちが意識してお手伝いをして



現在のポンタン小学校

得たお金、アルミ缶収集やバザーなど子ども自らが作業しての得たお金、あるいは“ハンガーランチ”の精神でおやつやおもちゃ等を節約して貯めたお金（ワンコイン500円）など。対象は、日本の小学生～高校生(1万人)。

単に資金だけでなく「子ども企画委員会」を立ち上げて建設校への夢や意見を出し合い、実際の建設案に適用して実現、校舎に付加価値をつけます。「子ども企画委員会」の代表児童は、現地視察と開校式に参加、ラオスについてより深く理解を深めると共に、現地の子どもたちと直接交流。（広瀬小の他、福井県平章小・東京都小山田小等が協同発起人として内諾済み。今後、AEFA交流校や、子ども自身の自主的な活動に呼びかけて資金を集めます。）

ご協力いただいた日本の子どもたちの名前は、銘板にして新校舎に掲示。成長した子どもたちがポンタンを訪問して、自分の名前を見つける日がいつか来ることでしょう。

着工は2009年4月、開校は同12月の予定。



親子をつなぐ・絆を深めるプロジェクトに・・・

3/14 キックオフ・ミーティング開催！

仙台市立広瀬小PTA 澤村 範子
 武蔵村山市立第八小 小野江 隆校長
 橘幼稚園 三上 正芳園長
 橘幼稚園2008年度卒園委員長 鬼形まり・駿・レイ
 AEFA会員 国安 信弘、石塚 勝巳、吉田 さくら
 AEFAスタッフ (参加者順不同・敬称略)

3/14 AEFA事務所に、協同発起人の広瀬小から澤村さんを始め、趣旨に賛同するみなさんが集まりました。

「このプロジェクトは、“顔の見える支援ができる”、“双方向性がある”、“支援した子どもの名前が銘板になって残る”・・・いいですね～！」(澤村)

「グローバル化が進む中、こういう意識と“行動”は、今後ますます必要だと思うね。」(国安)

「そうはいっても、実際に進めるのはなかなか難しいと覚悟しています。国内にも困っている人がいるのに、なんでわざわざ海外に支援しなくちゃいけないんだと

か、逆に“かわいそうだから助けてあげよう”、と上からの目線になってしまったら、絶対にダメですからね。」(AEFA谷川)
 「予備校や塾や通信教育等、今の日本には学校以外にも“学ぶ場”がたくさんある。そういった所にこそ大事なことだと思うので、呼びかけていこうと思います。」(石塚)

「日本の子どもにとって、学校は当たり前にあるものですからね。そういう当たり前が、世界では決して当たり前ではないということに、気づいていないんですよね。」(AEFA遠藤)

「子どもが気づかないのは、“大人が”理解していない、気づいていないからなんです。」(鬼形)

「そうそう。逆に、子どもが気づいて変われば、大人も、絶対に変わります。」(AEFA遠藤)

「大人にできることは、あくまでも子どもが気づくための“環境

作り”だけ。それって実は、子どもの様子をよく見ていないとできないことなんです。今ウチで実践するのは、スイミングの帰りのアイスやジュースをガマンして、ラオスの学校に使お

うねって貯金してます。目的のある“ガマン”って、子どもにとっても楽しい“ガマン”みたいです。逆に、100円を気軽に使っていたんだわ～、と私も気づかされたりしてます(笑)」(鬼形)

「ん～。確かに、子どもが作業してお金を得るのは難しくても、“ガマン”した分を募金する・・・なら、できるかも！」(吉田)

「あと今考えているのは、小学校の読み聞かせの時間に、ラオスの子どもの生活を紙芝居で紹介したり、お話するとか・・・。それで理解してくださる保護者の方に、輪を広げていけたらなって。こういう活動には、“当事者意識”が必要なんです。」(鬼形)

「私の学校も地域の方に深く関わって頂いて様々な取り組みをしています。“地域”のみなさんは、すごいパワーを持っています。この活動も、ぜひ取り組みたいですね。今日はいろんな新しいヒントを頂きました。」(小野江校長)

「それぞれの取り組みを、お互いに紹介しあって、こんな面白いことやってるんだ、こんな気づきや効果もあるんだ・・・と、活動の輪を国内に広げていきたいと思います。」(AEFA金子)

「この活動に親子で取り組むことで、親子の会話が増えて“絆”が深まるんじゃないかしら。まさに“親子をつなぐプロジェクト”ですね～！」(澤村)

「一番大切なのは、子どもたちの“夢”や“希望”を、学校建設につなげること・・・。AEFAは、子どもたちの夢を育むお手伝いをしていきます！」

(AEFA佐藤)

「これから」の取り組みが、楽しみです！

ラオスの学校を、レゴブロックで作りました
 (中央 鬼形駿くん)



ポンタン小学校完成予想図

